

平成24年秋季特別展

生と死 武士の美学

鉢形城歴史館平成24年秋季特別展は「生と死 武士の美学」と題し、甲冑展を開催します。今回の特別展は、社団法人日本甲冑武器研究保存会(日甲研)の全面的な協力を得て、副会長・小菅一憲氏のコレクションの中から厳選された優品を出展していただきました。

武士があらわれたのは、平安時代の後期10〜11世紀ごろで、古くは「もののみ」と言われ、戦場の専門家である武士は、戦場では常に生と死の狭間に身を置いており、死生に独自の美学を持っていました。勝てば勝ち衣装、死ねば死に装束ともなる甲冑には、随所にその美学が表現されています。

武士が武勲を上げること、生きる糧を得ることであり、戦場での活躍ぶりを評価してもらいたく、自己主張する必要がありました。変わり兜は、自己主張だけでなく、各々が「生」への美学を表現したものとさえいえます。また、甲冑を装着したまま前

かがみになっても甲冑がずれ落ちないように、背を組紐で止める「水飲みみみ」は、水を飲む立ち居振る舞いに美しさを求めた「生」への美学が込められています。一方、武士は甲冑を着用する前、兜や胴甲に香をたきました。これは、死後野晒しになっても死臭を和らげようという、彼らの「死」への美学の現れでしょう。

が凝らされています。特に、デザインという面では「変わり兜」は注目に値します。安土・桃山時代から江戸時代初期にかけて、動植物など自然界のあらゆるものを兜にかたどり、多くのパリエーションを生み出しました。甲冑を構成する素材の素晴らしさや、機能を損なわないデザインなど、総合芸術的な要素は現在の日本に受け継がれています。



展示資料の紹介

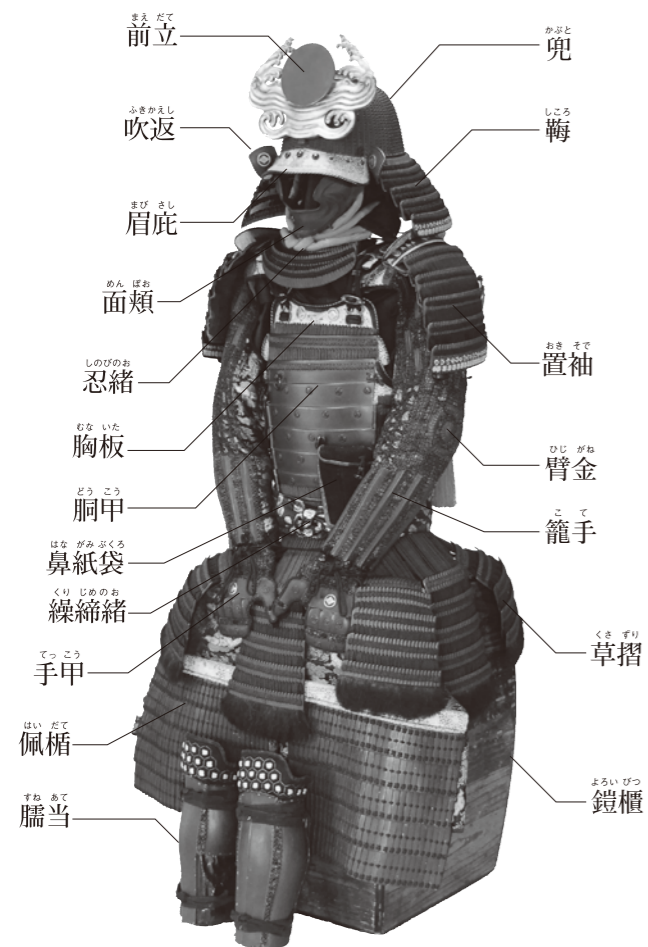
今回の展示は、当世具足・変わり兜・その他の付属品の三部構成となります。当世具足とは、室町時代後半から江戸時代初頭にかけての鎧の形式のことです。「当世」とは「今時」という意味で「具足」とは兜と胴・臍当てなどがそろった甲冑を指します。

デザインの兜を指します。その他の付属品として、面頬・喉輪・前立・軍旗を展示します。面頬は顎と両頬を防御するもので、喉輪は喉や胴の上部の隙間を防御するためのものです。前立は、装飾や敵味方の区別のために付けた兜の飾りです。軍旗もまた、合戦時や行軍時に敵味方の区別を付けるために用い、加えて自軍の士気向上、合図などの際に使用しました。

当世具足

鉄錆色漆塗鉄綴桶側五枚胴具足 六十二間小星兜付

兜には「上州住成国」の銘が記されています。成国と伝えられる作品には、武田信玄の「諏訪法性」の兜が有名です。胴甲には、鉄錆に模した茶褐色の漆を塗り、落ち着いた色合いとなっております。背面の紐の結び目も優雅さが際立ちます。兜の鉢の部分は室町時代のもので、それを江戸時代初期に仕立て直しています。さらに、万延年間(1860〜1861)に補修したと、鎧櫃に記されています。なお、この具足は日甲研で重要文化資料として認定されています。



当世具足の名所

それでは、主な展示品をご紹介します。

